森本倫世さんが最優秀賞

ＮＨＫ青年の主張
全国大会

一月十五日にＮＨＫホールで行われた第三十二回ＮＨＫ青年の主張全国大会で、岡豊高校三年、森本倫世さん（大埇）が最優秀賞に輝きました。

森本さんはくも膜下出血の後遺症にもめげずに、老人ホームでのワークキャンプの体験を通して、福祉の道に進む決意をした自分の体験を発表しました。そして、「今度は自分が人の役に立ちたい」と話していました。

誰かが私を待っている

「おーい、森本菌がきたぞっ。バイキンだ、バイキンだ。」

クラスの男子が、私に触って逃げて行きます。私に触った者が鬼になる追いかけっこです。

今日も私に対するいじめが始まりました。ご覧の通り、私の左手は今でも少し不自由です。服のボタンを掛けられるようになったのは、小学校六年の時です。辞書を引いたり、卵を割ったりするのは、私にとっては今でも難しいことです。小学校一年の時、「脳動脈りゅう破裂くも膜下出血」という舌をかみそうな難病に襲われ、十日間もこん睡状態が続いたあげく、助かる確率一〇％といわれながらも、奇跡的に命をとりとめました。しかし、その代償として、硬直した左手と、自分の意志では動かない左足が残されました。

一年余りの入院の後、私はやっと学校へ戻れました。もう一度、みんなと一緒に学校へ行ける！しかし、私を待ち受けていたのは、興味と好奇心といじめでした。思い出したくもないことが続く八年あまりの日々の中で私は、一体どれほどの人間だろうか、みんなが言うような「役立たず」なのか、どうにかしてそれを知りたいと思い続けてきました。

私の前に道が開け始めたのは、新しい高校がつくられるという話を、聞いてからです。岡豊高校です。校歌の一節に「人の命の尊さを訓えて咲くや山桜」とか、「試練の嵐猛くとも濁りにそまず清純に」という文句がありますが、人に言うと笑われそうなぐらい感動しました。まだ学校が建つ前の田んぼに行っては、ああここに建つんだなあと楽しみにしたものです。この学校には悪口を言う人は誰もいない、伝統がない、何の色もついていない。それが私の救いであったからです。

でも、私が本当の道を見つけたのは、一枚のポスターからです。「あなたもボランティアに参加してみませんか」というワークキャンプへの呼び掛けでした。私は今まで、他人に手を差しのべられた記憶はほとんどありません。でも、私はいつも優しく差しのべられる手を待っていました。私のように、不自由な思いをしながら声を掛けてくれる人を待っている、第二第三の私がいるに違いない。そう思うといても立ってもいられず、老人ホームでお手伝いさせていただくことにしました。

「あて、おまんが好きや。おまんについて行ってもえいかよ。」

「うん。いいよ、おばあちゃん。」

「そしたら行こう。」

このおばあさんは、ホームを歩き回るのが好きでした。看護婦さんが止めても、手をパチンと払いのけ、私の手を握って笑います。

「歌、歌うてや。」

疲れると椅子に座り、私にせがみます。私は、覚えたての「青い山脈」を、繰り返し歌ってあげます。おばあさんは決して歌わないのに「歌、歌うてや。」と私に言いました。でも、最後の日に、

「ああおい山みゃーく。」

と、たったそれだけですが歌ってくれた時は、本当にうれしくて泣きそうになりました。

私がした事は、それほどたいした事ではありません。それにもかかわらず、こんなにまで私を、私という存在を喜んでくれる、待っていてくれる人たちがいる。やっと仲良しになったお年寄りに涙は見せまいと決心したのにお別れの時は素直に泣けました。それは、私の感謝の涙でもありました。

今、私は福祉の道に携わりたいと思っています。自分の境遇を嘆き、黙って耐えるよりも、自分が他人に何かしてあげることのできる素晴らしさの方が私を生かして行くと考えるようになりました。現実は厳しいですが、それでも私は「誰かが私を待っている。」と心に言い聞かせながら、一歩一歩進んでいくつもりです。私が生きている価値を、これから接する多くの人々と一緒に探してみたいと思うからです。